プロレタリアートのヘゲモニーについて

バザーロフは解党派の雑誌の読者に、つぎのように説いている。「きたるべき高揚の時機に、情勢がどうなるかを予言することは、まったくできない。もし都市と農村の民主主義派の精神的特色が、五年前とほぼ同様であるなら、マルクス主義のヘゲモニーは、ふたたび事実となるであろう……しかし、民主主義派の特色が本質的に変化するかもしれないという予想が不可能であるとは、けっしていえない。たとえば、ロシアの都市と農村の小ブルジョアジーが、支配階級の政治的特権に反対する、十分に急進的な気分をもっており、十分に団結し、また十分に積極的ではあっても、しかしはげしい民族主義的精神が彼らのあいだに浸透していると想像しよう。マルクス主義者は、民族主義または反ユダヤ主義とは、どのような妥協をすることもできないから、このような条件のもとでは、おそらく、ヘゲモニーのことなどまったく忘れさられるであろう」。

これは正しくないだけではなく、おそろしくばかげたことである。もしも特権にたいする敵意が、ある層において民族主義と結びつくならば、このような結びつきが特権を取りのぞくうえて妨げとなることを説得するのは、はたして、主導者（ヘゲモーン）の仕事ではないのか？　特権との闘争が、民族主義でもうけている小ブルジョアにたいする、民族主義でくるしめられている小ブルジョアの闘争と結びつか**ない**ことが、はたして、ありうるであろうか？　あらゆる特権に反対するあらゆる小ブルジョアジーのあらゆる闘争は、つねに、小ブルジョア的な限界性と中途半端との痕跡をおびているのだが、こうした性質との闘争こそ、「主導者（ヘゲモーン）」の仕事なのである。

……マルクス主義がわれわれにおしえているところでは、小ブルジョア大衆は、資本主義が存在しているかぎり、不可避的に、反民主主義的な特権（このような特権は、**純粋**の資本主義のもとでは理論上かならずしも「不可欠のものではない」が、しかしこれらの特権の**清掃**は、資本主義が死滅するまで長びくであろう）にくるしめられ、経済的抑圧にくるしめられるであろう。だから、資本主義がつづくかぎり、これらの特権とこの抑圧の源を説明し、それらの階級的根源をあきらかにし、それらにたいする闘争の範例をしめし、自由主義的な闘争方法の欺瞞性をあばきだす、等々する「主導者（ヘゲモーン）」の任務は、**かわらない**のである。

マルクス主義者は、こう考えている。その生活条件が特権との和解をゆるさないような陣営、プロレタリアだけでなく、半プロレタリアおよび小ブルジョア大衆をもふくむ陣営における「主導者（ヘゲモーン）」の任務を、マルクス主義者は、こう見ている。ところがチュコフスキーらは、この陣営がおしのけられ、おさえつけられ、地下へ追いこまれたからには、とりもなおさず「ヘゲモニーは消滅した」のであり、「ヘゲモニーの問題は、もっともくだらない誤解となった」と考えている。

注）……は本文中の略……は青山の略　　第 17 巻 P68~68『わが解散論者たち』

『ムィスリ』第2号および第3号、1911年1月および2月

ポイント

小ブルジョアジーが私たちの目標に共感を示さないからと言って、「それを言うのはまだ早い」などと言うのはマルクス主義者ではない。 あらゆる特権に反対するあらゆる小ブルジョアジーのあらゆる闘争は、つねに、小ブルジョア的な限界性と中途半端との痕跡をおびている。資本主義がつづくかぎり、これらの特権とこの抑圧の源を説明し、それらの階級的根源をあきらかにし、それらにたいする闘争の範例をしめし、自由主義的な闘争方法の欺瞞性をあばきだす、等々するのが「主導者（ヘゲモーン)」の任務である。

もっとも、マルクス主義者ではない人たちにとっては「プロレタリアートのヘゲモニー」などという恐ろしい言葉は、反共攻撃の格好の材料となるので、見ないように目をふさぎ、聞かないように耳をふさぎ、しゃべらないように口をふさぐしかないのであるが。